



意外と高い？京大生の心停止現場遭遇頻度

研究者所属・職名： 医学研究科・准教授

ふりがな にしやま ちか

氏名：西山 知佳

主な採択課題：

- [若手研究（B）「全新入生を対象としたAED救命講習会の長期縦断疫学評価」（2017-2019）](#)

分野：疫学、救急医学

キーワード：心臓突然死、心肺蘇生教育、胸骨圧迫、AED、大学生

課題

- **なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）**

いざという時のために、心肺蘇生の方法を学び身に付けておくことの重要性は多くの人理解していると思う。しかし、「本当に自分が使う場面はあるのか？」と聞かれた際、「あなたが」心肺蘇生の方法を身に付ける重要性を説得させるエビデンスはない。これまで一般市民が心停止場面に遭遇する確率を誰も計算してこなかった。

この研究を行う前提として京都大学では、全新入生に対して心肺蘇生の実技指導（胸骨圧迫とAEDの使い方）を実施しており（QRコード参照）、これまで15,000人以上の学生にこの教育を行ってきたという事実がある。

これらの学生たちのフォローアップとして本研究では、大学生活において①人が倒れた現場に遭遇した経験があるか、②その時どのような救命行動を行ったか、行わなかった場合③なぜ救命行動ができなかったのかを調査した。

- **研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）**

いかに多くの人から回答を集めるか、その一言に尽きる。

本学の学生健康診断の機会を利用し、その場で質問用紙を配布し、その場で回答をしてもらおうという行為をひたすら繰り返した。学生にとっては、ウザい**お姉さん**だったかもしれないが、お陰で5,549人から回答を得ることが出来た。



全新入生への
心肺蘇生教育の詳細

意外と高い？京大生の心停止現場遭遇頻度

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

- ① 心停止現場に遭遇する学生は珍しくない：学部4年間で25人に1人は卒業するまでに遭遇する
- ② 心停止場面で心肺蘇生教育が活かされているかも：心停止現場に遭遇した学生の2人に1人は何らかの救命行動*を行っている
*何らかの救命行動：胸骨圧迫の実施、AEDの使用、119番通報や倒れている人への声掛け、救急隊の誘導など
- ③ 人任せになってしまう人も多い：救命行動をとれなかった最大の理由は「他の人が既に救命行動を行っていた」だった



救命行動は1人でできるものではなく、実際の救命現場では多くの人の力が必要になる。

例えば、胸骨圧迫を正しく行うには、約30kgの力で押し続けることが求められる。つまり成人男性でも長続きは難しい。

救急隊が到着するまで、複数人で交代しながら胸骨圧迫を続けること必要である。

人任せではいけない。

(Nishiyama C et al. Resuscitation, 2019:141; 63-68)

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

本研究の成果は、一般市民に心肺蘇生講習会を受講する重要性を認識させるものである。

今回初めて一般市民が心停止現場に遭遇する頻度を明らかにしたことで、

一般市民が心停止が意外に身近であることを理解し、救命意欲を高める効果が期待できると言える。



写真1 胸骨圧迫とAEDの使い方を学ぶ教材
CPR Training Boxあっぱくん®